

かつて両親の住まいとの関係で倉敷と縁があり、いわゆる美観地区に通ったことがある。倉敷は江戸時代寛永年間に幕府の天領に定められて以来、物資の集散地として発達したことはよく知られている。その経済力と、文化的素養に秀でた大原孫三郎のようなキーパーソンの力によって、今に残る美しい街並みと暮らしの文化が創り出された。それほど広くはないが、天領としての街並みの密度は高い。

この美観地区は1969年に倉敷市の景観条例に基づき定められたものである。その内訳は15haの伝統的建造物保存地区と6haの伝統美観保存地区からなる。その積極的な保存再生の仕事を審査するために、つぶさに見て回る機会を得た。この地区を活動の拠点としている建築家榎村徹の仕事であり、その基本は伝統的な建築文化の保全と現代的な用途、ライフスタイルへの読み替え、そして止揚である。

現代の建築家にとって、このような伝統文化との



写真95-1 倉敷美観地区の屋並み

\*1 天領：江戸時代における江戸幕府の直轄領  
\*2 榎村徹（1947～）：倉敷における古民家再生の旗頭

この見開きの画像：ワードから画像をコピーすると部分的に切れたり色調がおかしくなってしまいます。



写真95-2 美観地区の路地



写真95-3 保全改修された民家

距離感の取り方や、解釈の仕方がその作風を決めると言って良い。一般的に大学における建築教育の過程における歴史的素養の涵養は必ずしも十分とは言えず、生産技術の変容に裏付けされた現代建築のなかで、正当な立ち位置を獲得してこなかった。特に住まいの作法が街並み全体に及ぶしみじみとした生活環境の構築に近代が寄与してこなかったことを思うとき、倉敷の美観地区のような存在に失われたものの大きさを感じるのである。

こうした遺産が豊かなまちに長く身を置き、濃密な人間関係を紡ぎ育みながら、榎村たちは地域、地区の建築家として仕事を積み重ねてきた。その地道で膨大な成果を見ていると、決してたやすくは守れないはずの分厚い伝統文化の重みと、その中でなお前進しようとする積極的な意図を十分に読み取ることができ。そこに、ある種嫉妬に似た感情を覚えるのは私だけではないだろう。



写真95-4 倉敷建築工房榎村徹設計室